

平成26年12月2日

学位請求論文（課程博士）審査報告書

学位請求論文：吉屋信子論

学位請求者：文学研究科日本語日本文学専攻 氏名 山田昭子

審査委員

主査 山口政幸

副査 高橋龍夫

副査 米村みゆき

本博士論文は、大正から昭和の戦後まで活躍した吉屋信子の文学について考察したものである。全体は8章で構成されている。まず第1章では、近年高まりを見せた吉屋信子研究の紹介と整理がなされており、続いて、本研究の各章の概観とその意義が述べられていく。続く第2章から本論が始まるが、ここではまず吉屋の童話作品という、これまでの研究史からは抜け落ちていた吉屋初期の文学営為に光があてられる。吉屋信子と言えば『花物語』だが、ここで論者が紹介した童話というジャンルは、その『花物語』に並行して書かれていたという事実をおさえたうえで、その両者の交錯するさまが「黄金の貝」「二つの貝」「桜の島」などの童話作品に顕著に認められていくのを丹念に読み解いていく。すでに少女同士の閉ざされた空間の中で独自のエロスを漂わせていた世界が、童話という本来年少の読者を対象とするジャンルにあふれ出ていくさまをよくとらえていく。当時の雑誌「良友」や「幼年世界」の編集者である巖谷小波や浜田広助との接触にも目配りを届かせている。特に浜田の「花びらの旅」と吉屋の「一つのチョコレート」の死をめぐる同一の主題を読み解いたのは、興味深い指摘であった。

第3章の「睡蓮」論では、少女同士の裏切りというテーマが扱われる。本来少女同士の友愛の物語を基本として描く『花物語』の中であって、少女が少女に手酷い仕打ちを与える、または傷つけて終わるような作品とは、一体どのようなものであろうか。本作には仁代と寛子という少女が登場する。二人はともに日本画家を目指す少女たちであるが、二人

が競い合う少女であるということが、この物語に裏切りという新たなテーマを生むことになるのだと論者は指摘する。論者の解釈によれば、「夢想的少女」が「非夢想的少女」に否定される構図がここにはあり、それと同時にその行く末を見守る同性の年長者のまなざしがある種の救いとなって表れているとしている。同じ対象を競い合うものとしてのライバル関係がここにはあるのだが、その時代的な出現を追ったのが、次の章の『「少女倶楽部」における運動小説』についての論考である。第1章の見取り図で述べられていたように、この第4章は第3章の資料的補足としての意義を持つ。大正の終わり近くから、テニスをはじめとする「運動小説」と呼ばれるべきジャンルが数多く少女雑誌誌上にも現れてくるが、ここでは「少女倶楽部」を通時的に調べることで、今まで誰も手を染めずにいた未開拓なジャンルをまとまりとして掘り起こすことに成功した。吉屋自身はこうした運動する少女を描くことはなかったが、すでに少女たちは運動という新たな身体的な価値づけの中に身を置くか、また野球のようにそこに応援者として参加することでも、スポーツを身体に取り込んでいっていた。吉屋によって『花物語』的な世界に安住する少女小説が棄却される時期が、こうした時代背景の綿密な根気ある調査によって、逆説的に意味づけられる意義は非常に深いと言えよう。なお、「睡蓮」については大正時代を通じての白樺派の美術紹介という史的意義もあわせて押さえるべきであったろう。

それでは『花物語』の世界から抜け出した少女たちはいったいどこへ行ったのか。その答えとして用意されたのが『からたちの花』を論じた第5章である。『からたちの花』はそれまでの一話完結の短編連作形式とは違い、雑誌「少女の友」に1年にわたり連載された長編ものである。ここでは麻子という容姿にコンプレックスを持つ少女の成長の過程が描かれていく。その際に吉屋が依拠したものとして、吉屋自身が渡欧さきのフランスで入手したマルグリット作の『少女ゼット』の存在を指摘していった。また作品内に登場する北原白秋の著名な「からたちの花」の童謡がどのように主人公の麻子とかかわっていくかに着目し、少女の成長が物語展開といかに緊密に結びつけられているかを論じて余すところがない。一つの作品論としては本博士論文中もっとも高い水準の出来を示した論文と断言できよう。

次の『「新しき」ボルネオ論』は、吉屋の戦時下の動きを、彼女が赴いた外地との関係から論じたもので、作品論からは離れた地平を切り開く論文である。19世紀以前からの日本とボルネオとの歴史的関係を見据えたうえで、それまで読書から構成されていたボルネオとは異質なボルネオ像が、日本統治下の時代に、林芙美子、築地藤子といった滞在した日本人女性作家（築地はもともと歌人）によって生み出されていった経緯について調べていき、吉屋の戦時下作品である『新しき日』の意味を、先行したアメリカ人女性作家の残した『風下の国』という作品との比較から論じていく。吉屋にとっての戦争とは何だったかという大きな問いかけを欠くという恨みはあるものの、大戦下のコロニアリズムを共時した先達者として、キースという親日の女性作家の存在を拾い上げた功績には大きいものがある。

戦後も吉屋は休むことなく執筆を続けていく。いや戦後になったがゆえに可能となったような問題作を独自にものしていった。昭和26年に書かれた『安宅家の人々』は、果敢にも夫婦の性にまつわる困難を扱った作品である。安宅宗一という「精神薄弱者」の良人と、その妻国子を描いた吉屋は、その10年後の昭和36年に発表する『女の年輪』においても、「精神薄弱者」の妻とその良人の物語を描いていく。吉屋作品において「母」は重要なキーワードの一つであるが、『安宅家の人々』の国子もまた、宗一によって複数の役割としての母を演じさせられていた。ところが、宗一はやがて義妹である雅子へと、より肉感的な母を見ることでつよく惹かれていってしまう。安宅家に嫁いだ相嫁としての義理の姉妹のそれぞれの性の問題が二分化され、ねじれた関係性として示されていくところを、戦前の代表作『女の友情』や『良人の貞操』の延長であると捉え、『女の年輪』に至って女の友情が断ち切れ、女の人生や夫婦の関係を初めて前景化したということを論者は述べていく。

第8章ではそれまでの物語方法とは異なる、取材に焦点を当てた戦後作品が論じられていく。昭和37年、『女の年輪』の連載を終えた吉屋は、創作小説を離れ、次第に事実取材した伝記作品、歴史小説へと傾斜していく。ここで取り上げた『香取夫人の生涯』は完全なる評伝作品ではなく、手記を下地にしながら一人の妃殿下を創作した、いわば準創作作品であるといつてよい。この作品は、創作と評伝作品とを繋ぐものであり、『香取夫人の生涯』を書くことで、吉屋はのちの『女人平家』『徳川の夫人たち』の着想を得ていったと論者は指摘している。ここでの最大の功績は吉屋が独自に取材したとされる梨本宮伊都子の手記をできる限り復元してみせたことである。それによって、虚構化された『香取夫人の生涯』との距離も測れるわけだが、その事実調査に手間取って、やや読みの希薄なものになり、のちの歴小説との懸け橋の部分にも空白部が生じたことは残念だが、基礎研究としての意義は極めて大きく、戦後の臣籍降下という問題系を含む本作を研究の緒につけた功績は高く評価されるべきものである。

総じて、吉屋信子という作家が、単なる「少女小説の創始者」にとどまらないスケールの大きな面を持ち合わせた作家であることを、この緻密に構成された研究を順次読み進めることで改めて知ることになるのは確かである。一つ一つの研究にはその折に吉屋をとらえるための最善とおぼしき方法論が採択されており、それは論者の研究方法が狭い範囲に萎縮してないことを表している。また資料的な側面をしっかりと充実させて論に取り組んでいる姿勢はつねに一貫しており、研究者としての資質の高さを備えていることを証明している。望蜀を記せば、作家としての吉屋信子のモチーフを掴み得て作品を論じていく力強さを備えてほしいが、文学研究の場合それは人間の成熟する年齢の過程と無関係ではないので、やがて訪れていくことでもあろう。本研究によって数多くの資料が吉屋を読み解くための基礎資料として紹介され、論者の犀利な読みによって、新たな吉屋作品の意味が再発見されていった。文学博士の学位を授与するに値する論文であるのに間違いないことを、審査を終え、ここに判定する。